

かくやの鏡

かくやの鏡



望月 俊弘

かぐやの鏡

女性の顔の美醜は、その人生にどのような反映をもたらすのでしょうか。

これはある非常に器量が悪い女性に持ち掛けられた夢のような誘いについての話である。

A子は鏡を見ていた。そして大きな溜め息を声みたいに吐き出す。「美しくもないし、可愛くもない。……でも愛嬌はあるかしら」

上目づかいにパチクリする。A子は手鏡を投げつけない衝動にかられたが、その代わりに「キャンディ・キャンディ」の歌を聞く。

いつもみたいに泣けてしまいそうになったけど、これからお出掛けなので目を腫らすと最悪だからCDを止めた。それも切ない。

八月——かんかん照りの中、近くのスーパーまで買い物に行く。A子の後姿は完璧だった。それだけに追い抜いて来て振り向く男が多く、そのがっかりした顔や言葉に傷つけられることが数知れなかった。

A子が俯いてせかせか早足で角を曲がると、生温かい風が吹いて顔にパサリと一枚の紙が張り付いた。

『貴女は選ばれました。午後二時十七分着』

時間は時計通りで、さらに宛名にA子さんのフルネームが書いてありました。〈嘘？私何んかが何に選ばれたのかしら。ちょっと薄気味悪いけど〉『貴女は、望み通りの顔になれます。つきましては、枠で囲まれたスペースに、お望みの顔の絵と、言葉での補足説明をお書きの上、次の満月の夜“化愚夜神社”に来て頂ければ詳しく分かります。尚、この紙は最終的には契約書となりますので、お忘れなく』

さて十五夜の化愚夜神社——名月は、見つめ続ける程に、妖しさを増してゆくようでした。神社の鳥居は、この世ならぬ世界への出入口のような佇い。

A子はそこまでの階段を登りきって立ち竦んでいる。辺りは静寂に包まれている。

戸惑いながらA子が鳥居を潜った突如、世界は一変した。何所からともなく聞えてくる女性の啜り泣き、カラスの耳障りな鳴き声、悲しげなピアノの旋律、“ひゅうう・どろどろどろ”という人魂独特の調子、それらが不気味な間を取りながら沈黙を破る。

墓場へ向かう道に沿っては、狛犬のような像が、ずらりと並んでいた。人間みtainな髪をどれも垂らしている。どの面も女性地味な妖艶さを漂わせている。

A子が本能的に後ろを振り返ると、“ひゅうう・どろどろどろ”と目の前に青白い人魂が回り込み、「ようこそA子さん。さあ、奥に進んでかぐやの鏡を手にお取りなさい」と言って、すつ、と消えました。A子は従いました。

——かぐやの鏡。一見どうという所の無い丸い青銅の鏡。

青白い月光の下、うっとりする程上品な白い顔が鏡に映っていました。

「私はかぐや姫。早速ですが、契約書を見せて下さい——貴女の望む顔はこれで宜しいですか？」

別の人が鏡に写りました。

〈絶句!! 私の全パーツを三センチメートルずつ自在に動かしてもこれほど整った上に個性は出ない〉イメージとぴったり重なった。

「さあ、美しき顔でこちらの世界へ旅立つのです。私と交代に!!」

「ええっ? それは聞いてません。私やっぱり帰ります」

「ちょっと待って下さい。なんの心配もいりません。ただもてもてで困るだけです」

「あの一っ。私、こっちの世界に好きな人がいます。こんな私にも優しくしてくれる人で、他の誰かとじゃ比べる意味などない位好きなんです。だから彼の在不在そちらには……」

「そーかい。そーかい」かぐや姫が露骨に嫌な顔をして言いました。「あんた良かったねえ。美人面犬になんなくてすんで。あーあ私は来年の名月にあんたみたいなブスが来るまで化け物の儘よ。雄犬共の相手もね」

「そんな……。御免なさい。――でも、ここに在られるのはB君の御蔭なのね」

そこへ人魂が音と共に現れ、A子に言いました。

「貴女は、美しい心を持っていらっしゃる。その宝とこの世界での美を幾らか交換しませんか?」

〈なんだか恐いわ。でも、鼻ペチャとソバカスが取れる程合だったたら……。やだ、どうしよう。だけど性格は直せるけど不細工は直らないってよく男の人は言ってるし、……。B君はどうなんだろう。B君の為にも綺麗になりたい。見苦しくないように〉

「決心はつきましたか? 取り敢えず、かぐやの鏡を覗きあれ。――これが、貴女のお顔立ちです。どうです?」

A子は、唇を痛い位噛み締めた。そして顔を背けて言った。

「どうすれば――」

人魂が言った。「一つ数え上げる度に、貴女の心は徐々に汚れてゆき、顔は段々と美しくなっています。納得した所で、『辞め!!』と言って下さい。百まで数えます。まずは契約書に爪印を――はい!! それでは鏡と向き合ってください。――始め!!」

A子は直ぐに辞める心算でした。ところが、それを実行する謙虚さも、カウント進行中に失われて行きました。人魂の声はもう耳に入りません。〈そばかすが減ったわ! 鼻が高くなった。でもB君の取り巻き連中より美しくなんなきゃね。まあ! どんどん可愛くなってくのね。これで白いワンピースでも着れば妖精よ! 化粧すればスーパーモデル。あとは性格ね。……性格?」

あら私ったら何考えてるのかしら、綺麗にさえなればいいのよ。こうなりや性格重視のB君なんかやめて他の……。ダメ!!)「辞め!!」A子が叫んだ時、人魂はすでに九十二を数えていた。A子は、うっとり鏡を見つめてから、「変な感覚」と漏し、化愚夜神社を去りました。

その背中に、「今夜の事を誰かに打ち明けたら顔だけが元に戻りますから」と人魂は声を掛けました。“びゅううん・どろんどろんどろん” ずっしり力を蓄えていました。

「変な感覚」は一人暮らしのアパートに帰っても続いていました。以前には味わった事のない、もやもやとした不快感。

取り敢えず寝る前に日記を付けることにしました。今夜は特別です。昔の日付けのものを読んでみることにしました。

我ながら、なんと純粹で優しく、いじらしい女の子だろう、と感涙し、今の自分との隔たりに絶望的にさえ成りました。

“自分を好きになれない”

「ピンポーン」

インターフォンが鳴って、大きな花束を抱えたB君が突然やって来ました。

ドギマギしながらA子はドアを開けました。

「今晚は」

B君は照れ臭そうに花束をA子の胸に突き出して「これどっかに飾ってね」と言いました。

「まあ大きいこと」

A子は、顰めっ面して花を見てからB君に微笑みました。

それを見詰めていたB君が言いました。

「A子が花と僕を見る時の顔が好きだった……。でも、これでライバルが一つ減ったみたいだな」

どんな事も優しく捌く笑みで白い歯がキラリと覗く。

「突然訊くけど、君に僕は必要かい？」

「うん。血液よりも」

A子は赤くなりながら答えました。

「そっか！」B君は真っすぐな目になりました。「僕は誰にだって優しいって言われるよ。でも、A子には僕だけを愛して欲しいんだ。独占したいんだ。A子の心が誰より美しいと思ったから」

「私は顔が美しいのよ」

A子はそう言うしかありませんでした。

「成る程、何故か君は印象がとても変わったようだ。でも、どうしたんだい。顔は性格ほど重要ではないじゃないか」

「そんな……。そんなの嫌だよ。わ、私なんのため自分が嫌いになっちゃうまで……」
A子は後悔の涙を流しました。

ただならぬものを感じたB君は言った。

「何かあったのなら話してごらん。僕だってこんなコッパズカシイ告白をしたんだぜ。
——心配なんだ、君が」

「B君——私の顔は九十二%あなたの理想のはずよ」A子は最後に全て残ったB君への一途な愛のもとに言いました。「今夜は夢をみていいのよ。そんな事しかもう私には出来ないみたい。今は心配なんてしないで……。明日になったら打ち明けるわ」

——そして一夜が過ぎました。

A子は、B君の愛情によって心の美しさを取り戻せると信じる事が出来ました。

〈B君の優しさに対する感謝の気持ちをまずは忘れまい。——それにしても、あのB君が『A子が自分自身を好きになったらな』と自分で断わっておいて、夜通しもじもじ我慢してる様子で言ったら……。プツ。可愛かったわ。——さて、お花は何処に飾ったら綺麗かしら。やっぱり優

しく日が当る所がいいわね〉

A子は秘密を墓まで持ち込む事に決めました。

かぐやの鏡

<http://p.booklog.jp/book/58560>

著者：望月俊弘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mochizuki-toshi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58560>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58560>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ